

世界三大大火のひとつ、振袖火事、

江戸の大火がもたらした
日本刀の飛躍的な発展

ローマ、ロンドン大火と並ぶ「世界三大大火」と呼ばれ、
 供養のため焼いた振袖が原因とする伝承から
 振袖火事とも呼ばれる明暦の大火。
 この火災によって膨大な数の日本刀が焼失し、
 その結果、巨大な刀剣需要が生まれていた。

文・伊藤三平（刀剣史研究家）

死者10万人以上を記録
未曾有の大火

明暦3（1657）年正月に当時の
 江戸市街地の大半を焼き尽くし、西
 の丸を除く江戸城まで焼失させた明
 暦の大火が起こる。2日間にわたっ
 て3カ所から出火し、猛火は冬期で
 乾燥していた江戸の地を北西の季節
 風に乗って舐め尽くした（図1）。
 被害の状況は次のように伝わる。

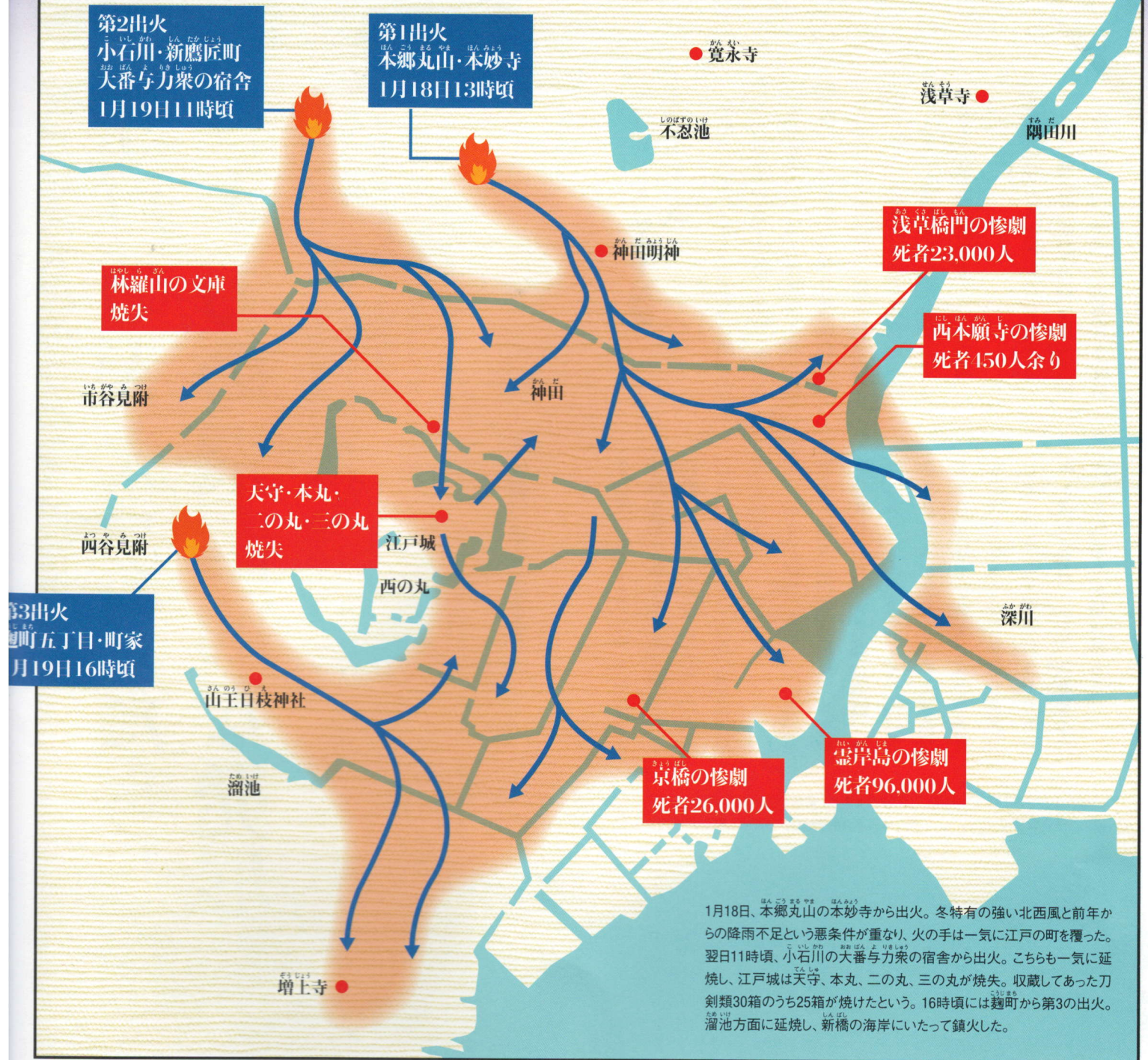
①死者は10万人を下らなかったとい
 う。当時の江戸の人口は町方人口
 （町人の人口）で28万人程度と推計

されている。これに旗本や諸藩の
 江戸在勤の武士や、寺社関係者が
 同程度いたと仮定しても、全人口
 に占める火災での死者の割合は想
 像を絶する。

②江戸城も天守閣、本丸、二の丸、三
 の丸が焼失。西の丸だけ残るとい
 う惨状だった。大名邸は当時、江
 戸にあつた214家のうち、約75%
 の160家が焼ける。旗本屋敷は
 770家以上が焼失。寺院や神社
 も例外ではなく350余りが被害
 に遭う。そして町家は400町余
 りが焼け、橋は一石橋、浅草橋を
 ぞいて60余りが焼け落ちる。

死者およそ10万人以上を記録した明暦の大火は、書物などを通じて西欧でも知られるようになった（田代幸春
 画「江戸火事図巻」部分、東京都江戸東京博物館蔵）。Image：東京都歴史文化財団イメージアーカイブ

図1 「明暦の大火」による焼失の状況



地図は吉原健一郎・大浜徹也編『江戸東京年表』(小学館)を参考に作成。焼死者の場所、数は竹内誠監修『ビジュアルワイド 江戸時代館 第2版』(小学館)、浅井了意の仮名草紙『むさしあぶみ』を参考に作成(伊藤三平著『江戸の日本刀 新刀、新々刀の歴史的背景』(東洋書院)より転載)。

火災時には刀剣類を池に投げ込み避難

刀剣も次のように大きな被害を被っている。

- ①江戸城に収蔵していた刀剣類として30振り入りの刀箱が30あったが、25箱(約83%)が焼けたとされる。
- ②『享保名物帳』には168振りが選定されているが、ほかに焼失した名物80振りが所載されている。焼失した原因は明暦の大火が69振り(約86%)と大半を占める。残りは大坂の陣で9振り、本能寺の変で2振りである。

大名邸、旗本屋敷、御家人屋敷の刀剣被害については史料がないが、大名邸は75%が焼失しているのである。推して知るべしである。

正徳2(1712)年の『御家人分限帳』には、旗本5398人、御家人1万7399人が記されている。旗本は知行高に応じて軍役(戦時動員兵力)が定められている。例えば200石取りでは供連8人、侍1人、鎧持1人など総勢16人(寛永軍役令)を伴って参陣することになる。軍役に備えての御用意刀(いざ出陣の際に藩邸の徒士ら、下級の武士たちが持つ刀)が大名邸にも、旗本邸にも常備されていたのである。旗本邸の焼失は

明暦の大火で焼失した名刀

徳川幕府8代将軍吉宗の時代、本阿弥家が幕府に提出したといわれる『享保名物帳』には、「焼失の部」80振り記載されており、そのうち69振りが明暦の大火で被災したとされる。

主なものとして、豊後藤四郎、新身藤四郎、凌藤四郎、足利飯塚藤四郎、包丁藤四郎、米沢藤四郎、樋口藤四郎など吉光の作が多数。江雪正宗、三好正宗、八幡正宗、江戸長銘、横雲正宗、伏見正宗など、正宗も多数。郷義弘では、三好郷、熊本郷、西方郷など、そのほかにも海老名宗近、青木来国次、三斎来国次、岐阜国吉などの名物がこごとく焼失した。

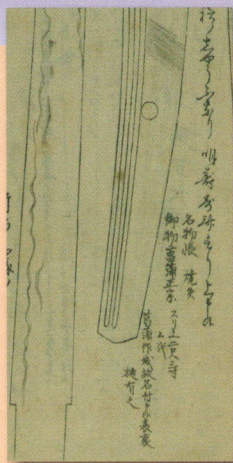
幕府はお抱え鍛冶の3代越前康継に命じて左の4振りを含む13振りを再刃させた。

薙刀直シ刀（無銘 伝栗田口吉光（名物 骨喰藤四郎） 豊国神社蔵（京都国立博物館寄託））
 『享保名物帳』で最多の34振りが記載されている名工・藤四郎吉光が、薙刀を磨上げて脇指とした作（刃長58・7cm 反り1・4cm／重要文化財）。

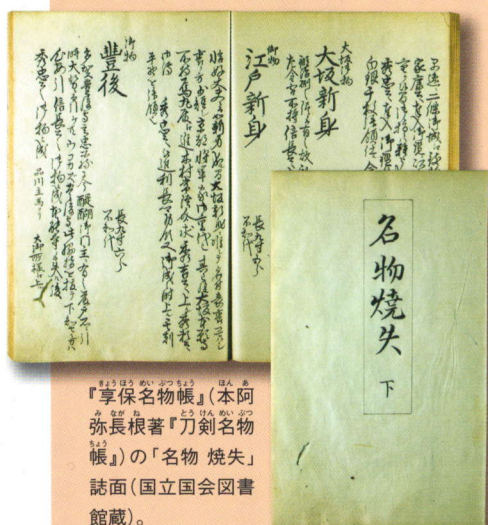
太刀 銘 国行（名物 不動国行） 不明
 足利将軍家から織田信長にわたり、明智光秀の手を経て豊臣秀吉、そして徳川家康へと受け継がれた屈指の名刀。越前康継に再刃させたのち、徳川将軍家に代々伝えられたが、昭和12（1937）年に重要美術品に認定されて以降、行方不明となった。

刀 金象嵌銘 永禄三年五月十九日義元討捕刻彼所持刀／織田尾張守信長（名物 義元左文字） 建敷神社蔵（重名）
 三好政長（宗三）が所持していたことから「宗三左文字」の別名がある。本能寺の変のち、焼け跡から見つかったとされ、豊臣秀吉が愛蔵。その子・秀頼から徳川家康に贈られたが、明暦の大火で焼失。やはり越前康継に命じて再刃させ、今に伝わる（刃長66・9cm、反り1・6cm／重要文化財）。

刀 磨上二尺三寸（名物 菅浦正宗） 不明
 徳川家康が関ヶ原の合戦の際に備用したというほど好んだ刀で、江戸時代初期に埋忠斎翁に磨上させたといい、家康の愛刀として長らく将軍家に伝わった。明暦の大火のち、越前康継が再刃して幕末まで伝えられるが、その後行方不明となった。



『埋忠銘鑑』に記載された「菅浦正宗」の押形（国立国会図書館蔵）。



『享保名物帳』（本阿弥長根著『刀剣名物帳』の「名物 焼失」誌面（国立国会図書館蔵））。

日本刀ストーリー

ま

明暦の大火と刀めいれきのたいかとかたな

770家以上と曖昧だが、これに武士の数は軍事機密であることが考慮されたのではなからうか。膨大な数の刀剣が焼失したと推測される。

火事に際しての刀剣避難に関して、山本純美氏の著書『江戸の火事と火消』（河出書房新社刊）によれば、慶長期（1596～1615年）の駿府城火災時に72振り入りの刀箱は重たく、中の刀を出して池に投げ込んで難を逃れた話や、元治期（1864～65年）の火災時に、大名邸の女性たちが幅広の帯に刀を差して避難した様子が書かれた資料が紹介されている。災害時の護身というより、刀の避難であろう。

元和年間（1615～24年）に生まれ宝永2（1705）年まで85年間を生きた旗本・天野長重が記した教訓的備忘録『思忠志集』の寛文10（1670）年正月15日の条には「今時忠之道を思はんは、武道の儀は常の習書くに及ばず、当分の御敵は火事也」と記している。

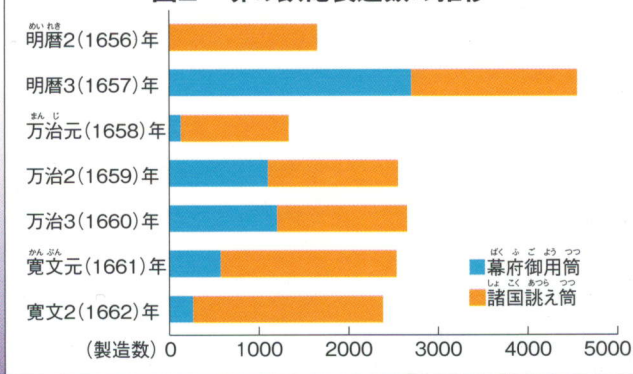
火事は巨大な消費、復興需要が江戸を活性化

火事は大きな災禍であるが、その後には必ず復興需要を生み出す。火災における復興需要が馬鹿にならないことは歴史書にも記されている。

「江戸の大火はこのちも絶えずお

きてあきらめた市民は、火事に江戸の花などと痩せがまんを言っていたが、火事こそもつとも大きな消費であった。そして、そのあとにはつねに巨額の土木工事がおこなわれ、日常生活に欠くことのできない家具・調度・衣類、あるいは絵画・刀剣・甲冑・装飾品などの莫大な需要を呼びおこした。諸大名は藩邸を再建しなければならなかったし、幕府は大名・旗本の救済、市民の救護のために多額の出費を必要とした」（児玉幸多著『日本の歴史16 元禄時代』中央公論社刊）

図2 堺の鉄砲製造数の推移



『堺市史 巻五』（資料編第二）の資料六十八「諸国ヨリ誂鐵砲員数」より（伊藤三平著『江戸の日本刀 新刀、新々刀の歴史的背景』（東洋書院）より転載）。

日本刀クロニクル

戦う日本刀

暮らしの中の日本刀

日本刀ミステリー

3万600両余りの復興金を当て、旗本には貸し金も与えられている。

堺鉄砲鍛冶の承応元(1652)年(元禄7(1694)年)における鉄砲製造数のデータから明暦の大火前後の値を抜き出して図示したものが図2で、明暦3(1657)年以降、鉄砲

の注文が大きく増加している。その増加要因は幕府御用筒の特需であることが理解できる。江戸幕府の鉄砲は、近江国の国友鍛冶への発注が主たるものであるが、それだけでは間に合わず堺にも発注されたと考えられる。

明暦の大火で誕生した輝かしい寛文新刀の時代

武器の需要増と武器性能の進化は戦乱が鍵だが、江戸時代には戦乱には無縁の寛文新刀と称される、質・量ともに輝かしい一時期が存在する。

江戸で長曾祿虎徹、大坂では津田越前守助広、井上真改という巨匠が生まれた時代である。

寛文新刀が生まれた背景として、筆者は次の5つの要因を考えている。

①寛永年間(1624〜44年)に隆盛した剣術流行は天和2(1688)年の他流試合禁止まで続く。介者剣法(鑑武者相手の剣術)から素肌剣法(鑑を着用しない武士相手の剣術)への転換として、刀の造込

みの変化(刀の平地の厚みを落として刀の頑丈さよりも斬れ味を重視し、反りを少なくして「突き」を行いやすくする)が起こり、それが新たな差料需要を生む。

②江戸時代前期は殺伐とした時代で、辻斬りの横行や、かぶき者という乱暴者が闊歩した。幕府は何度も禁令を出し、刀の寸尺を「刀は2尺8、9寸(約85〜88cm)、脇指は1尺8寸を限とすべし」と制限する。刀の長さは佩刀する人物の身長、技量で必然的に制限されてくるが、脇指での武用を考えると、制限の範囲内で長い方(1尺8寸≒約54cm)が有利である。しかるに古刀や慶長新刀の脇指は短いものが大半であり、法令に適合する刀剣(脇指)の需要が生じたと考えられる。

③辻斬りの目的の一つが刀剣の利鈍を検証することにあつたといわれているが、斬れ味に関心が高まり、山野加右衛門永久や山野勘十郎久英などの試刀家が現れ、その截断銘入りの新身の刀剣が好まれた。

④江戸時代前半は人口も増え、年貢収入も増加して各藩も財政的に余裕があり、また、武力によらない文治重視の藩政運営のために人材の入れ替え・補充も必要になる。脇指を差すことを許された町人にも経済力がついて、これらが新たな購買層になった。

⑤明暦3(1657)年1月の明暦の大火による刀剣類の焼失が新たな需要を喚起した。

知ってる? 明暦の大火と「寛文新刀」の名工

寛文新刀とは、寛文期(1661〜73年)に多く出現した刀で、反りが浅く先が細るのが一般的特徴とされている。

この時期に剣術で「突き」が流行したことで、無反り刀の需要が高まったとされる(この説には異論もある)。まるで棒のような体配の刀を、門差し(柄を前に長く出し、刀がほぼ水平になるような差し方)にすることが江戸で流行。長曾祿虎徹をはじめ大和守安定、上総介兼重、法城寺正弘など

の作にこうした体配が見られる。

一方で簾刃や瀾乱刃、数珠刃など、装飾的な刃文が目立つようになったのも寛文新刀の特徴で、特に華やかな刃文は、津田助広や井上真改など、大坂の刀工に顕著だった。

下の図は、寛文新刀の主な刀工の活動期を示したものである。明暦の大火の後の復興需要と寛文期の流行を経験した彼らは、刀鍛冶として最も幸運な時代を生きたのかもしれない。

明暦の大火

		承応元	明暦元	万治元	寛文元	3	5	7	9	11	延宝元	3	5	7	天和元	貞享元	3	元禄元
江戸	大和守安定		▲38歳					▲50歳										
	長曾祿虎徹		初期作											没				
大坂	津田助広			▲22歳・越前守受領												没		
	井上真改		菊紋を許される▲			2代和泉守国貞から真改と改名▲										没		
肥前	陸奥守忠吉				▲陸奥守となる													没

各刀工の実線部分は年紀作、あるいは截断銘で確認できる時期。破線は生存したであろう時期(伊藤三平著『江戸の日本刀 新刀、新々刀の歴史的背景』(東洋書院)より転載)。